

令和2年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－

ワークショップ実施計画書

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴い、今年度の巡回公演事業は本公演にワークショップ公演を取り入れ、実施校への訪問回数を1回のみとするプログラム構成で、実施させていただくことになりました。

制作団体名	有限会社 三栄企画
公演団体名	話芸の三きょうだい ～落語・講談・浪曲の世界～

内容
<p>指導者：桂雀太（落語家）・旭堂南龍（講談師）・菊地まどか（浪曲師）</p> <p>①三きょうだいトーク：「桃太郎実演」 桃を拾って帰り桃太郎が誕生するまでの一場面を、三きょうだいそれぞれの芸能（落語・講談・浪曲）で口演します。三者の芸能の特徴が一目瞭然となります。</p> <p>②芸能解説（クイズ形式） 児童・生徒達に①で受けた印象について、浪曲→講談→落語の順に質問をします。児童・生徒達の質問に回答するクイズ形式は、児童・生徒達の理解度が基準となるため、落語と講談と浪曲について理解しやすい芸能解説となっています。</p> <p>③体験コーナー 鑑賞者全員が対象で、会場内の自席に座ったままで体験が可能です。各出演者の誘導により、浪曲は発声。講談は張り扇を打つタイミング。落語は簡単な仕草について体験していただきます。このコーナーは各芸能が用いる演出方法の解説を兼ねています。</p>

タイムスケジュール（標準）
<p>30分間＋休憩時間（10分間を予定）</p> <p>ワークショップでは、落語と講談と浪曲の基本的なことを学んでいただけます。第2部はこの基本を学んだ前提での芸能鑑賞（60分間）となり、実質100分間公演となります。低学年において帰宅時間などの検討事項がございましたら、低学年は第1部のみの参加でも問題ございません。実施校様の諸事情に合わせてご対応ください。</p>

派遣者数
<p>全4名。 桂雀太（落語家）・旭堂南龍（講談師）・菊地まどか（浪曲師）・笑福亭智丸（進行補助）</p>

学校における事前指導
<p>ワークショップ公演は入門編として構成しているので、落語・講談・浪曲に関する芸能の事前指導は必要ございません。ただ話芸は演者が話す内容を、聞き手の皆様が想像することが出来て初めて成立するという特性があります。そこでこの機会は「お話を聞くお稽古の時間」でもあると、児童・生徒達にお伝えください。面白いところは大いに笑っていただいても結構ですが、演者が話し始めると聞く姿勢に戻る。このようにメリハリをつけて鑑賞するという事を、事前指導としてお取り組みいただくと幸いです。</p>

令和2年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－

本公演実施計画書

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴い、今年度の巡回公演事業は本公演にワークショップ公演を取り入れ、実施校への訪問回数を1回のみとするプログラム構成で、実施させていただくことになりました。

制作団体名	有限会社 三栄企画
公演団体名	話芸の三きょうだい ～落語・講談・浪曲の世界～

演目
昔話：「桃太郎」（ワークショップ対象演目） 落語：「饅頭こわい」または「動物園」 講談：「山内一豊」または「大名茶会」 浪曲：「稻むらの火」または「吉岡先生教壇に生く」

派遣者数
全10名。 出演者：5名。 桂雀太（落語家）・旭堂南龍（講談師）・菊地まどか（浪曲師）・藤初雪（曲師） 笑福亭智丸（進行補助） 弊社スタッフ：2名。舞台スタッフ：2名。音響スタッフ：1名。

タイムスケジュール（標準）
60分公演（トータル100分間／ワークショップ30分間・休憩時間10分間を含む） ・ワークショップ（30分）～休憩（10分） ①三きょうだいトーク「桃太郎実演」／②芸能解説（クイズ形式）／③体験コーナー ・本公演（60分） ①浪曲一席実演／②舞台発表コーナー／③講談一席実演／④落語一席実演 ※ワークショップの体験コーナーは、鑑賞者全員が対象です。本公演の舞台発表コーナーは、児童・生徒の中から体験者（予定人数：6名）を選んでいただきます。

実施校への協力依頼
実施校様に人員の協力依頼は基本的にごさいません。ただ下記につきましては、ご協力して下さる人員をお願いさせていただく場合がございます。 ①実施会場（体育館）が学校敷地内の奥に位置し、車両入校時が児童・生徒達の移動時間または休憩時間に重なった場合、児童・生徒達の安全を確保するための車両誘導人員。 ②ワークショップ公演での休憩時間において、お手洗いへ行った児童・生徒達が実施会場へスムーズに戻るための誘導人員。 上記人員の人数につきましては、実施校様の諸条件とご相談のうえで決めさせていただきます。また会場や控え室に学校備品やPTA備品、そして教材などがある場合は、破損や紛失への対策・対応として、事前に整理整頓をお願いしています。

演目解説

三きょうだいトーク：昔話「桃太郎」

川上から流れて来た桃を拾い、桃太郎が誕生するまでの一場面を、三きょうだいがそれぞれの芸能（落語・講談・浪曲）で口演します。三者による口演の比較は、それぞれの芸能の特徴が一目瞭然です。より一層、三つの芸能に対する理解と興味が深まります。

落語「饅頭こわい」

町内の者が集まり、世の中で一番怖いものは何かと話題にしていると、ある男が「まんじゅう」と聞いただけでも身体が震えると言い出し帰って行った。皆はこの男に困らされていたので、部屋にまんじゅうを投げ込んで日頃の鬱憤を晴らそうとする。そうして投げ込んでみたところ、この男はおいしそうに饅頭を食べている。そこで一人が「本当に怖いものは何や」と聞くと、この男「今は熱いお茶や」

落語「動物園」

ある男が、叔父の紹介で移動動物園のトラになる仕事を引き受ける。檻に入りトラの毛皮を着て、トラのふりをしているだけのアルバイト。気楽にしていると、園内アナウンサーが、ライオンをトラの檻の中へ放ち決闘させると宣伝する。男の仰天を余所に強そうなライオンが入ってくる。檻の隅っこで男が震えていると、耳元で大きな口を開けたライオンが「心配すな、俺もアルバイトや」

講談「山内一豊」

安土城築城祝いの流鏑馬神事のお触れを発した織田信長。その家臣山内一豊は、弓術・馬術ともに秀でた武将であるが肝心の馬が無い。それでも女房の千代は、夫に主君の前でその実力を披露する機会を逃してほしくない。千代の支えにより、一豊は流鏑馬神事の晴れ舞台に立つことが叶う。赤貧洗うが如しの一豊と千代の夫婦愛のお話。

講談「大名茶会」

豊臣家の七大名、細川忠興、加藤清正、池田輝政、浅野幸長、黒田長政、加藤嘉明、福島正則がお茶会に招かれる。この中で茶の湯の心得があるのは細川忠興のみ。他の六名は細川の真似をしてその場をやり過ごそうとする。ところが細川の隣に座る加藤清正が失敗し、続く者たちはそれを真似することになる。関ヶ原合戦へと発展する物語。

浪曲「稲むらの火」

銚子で醤油業を営む大商人・濱口梧陵が、帰省（和歌山県広川町）中に発生した安政の大地震（1854年）による津波から、自身の稲むら（ワラ）に火を放ち、それを目印に避難させて多くの人命を救い、被災後は私財で村人を雇用してその生活を保障し、その村人達とともに百年後の津波から村を守るため、築堤に取り組み奇跡の復興を遂げた逸話。

浪曲「吉岡先生教壇に生く」

室戸台風（1934年）は、ラジオの中継アンテナを破壊しつつ進む。警報を知ることが出来ない大阪は、無防備状態での直撃となった。吉岡先生が勤務する小学校では、突然強まった暴風雨に対して避難を始めるが、校舎はみるみる倒壊し始める。その校舎には逃げ遅れた児童がいた。倒壊寸前の校舎に飛び込み、自らの身体を盾にして、5名の児童を救い殉職された吉岡藤子先生の物語です。

児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

公演中に舞台発表コーナーを設けています。詳細は事前打ち合わせで説明させていただきます。練習と指導ポイントをまとめた映像資料（DVD）をお渡ししますので、落語と講談と浪曲に初めて接する方にも取り組みやすくなっています。過去には先生方が審査員となり、オーディションを行って該当者を選出された実施校もありました。

体験人数は、落語・講談・浪曲それぞれ2名ずつ。合計6名を予定しています。

- * 小学生は各学年から1名ずつを基本としますが、低学年または高学年からそれぞれ2名ずつや、5・6年生からそれぞれ3名ずつなど、参加学年に合わせて対応致します。
- * 中学生は各学年から2名ずつを基本としますが、3年生から6名を選出するなど、各実施校様の諸事情に合わせて対応致します。
- * 体験者の皆様には、開演までの間に出演者が事前指導を行います。所要時間は約15分程度で、事前指導の開始時間は、ご相談のうえで決めさせていただきます。

<体験内容>

落語：小唄の披露 / 講談：一息語りへの挑戦 / 浪曲：節による自己紹介

- * 体験していただく皆様の横に、それぞれ該当する出演者が補助として付き沿います。

<発表順番>

①浪曲 → ②講談 → ③落語

- * 舞台発表者のステージへの誘導は、出演者および弊社スタッフが行います。体育館の大きさによっては、対象者の皆様に予め前方に集まっていただく場合がございます。
- * ①と②の間で舞台の転換がございます。
- * 児童・生徒席の皆様は、掛け声と拍手の応援で参加していただきます。
- * 体験コーナーの進行は、出演者（落語家・講談師・浪曲師）が行います。

児童生徒とのふれあい

公演冒頭の「三きょうだいトーク」において、児童・生徒席の全員を対象とした体験コーナーを設けています。落語ではうどんを食べる仕草だったり、講談では駅台を叩く様々なリズムを打ってみたり、浪曲では「よ！日本一！」などの掛け声で大きな声で発声するなど、その場に座ったままで児童・生徒達は勿論、教職員から保護者の皆様まで、会場にお越しの方々全員で楽しめる内容です。

この落語と講談と浪曲は法話か生まれました。

僧侶達はお釈迦様の教えを、また、それぞれの宗教の開祖や始祖の教えを、いかに噛みくわいて伝えるかということに絶えず心をくわいでいました。ある僧侶は、人々を笑いの中でごく自然に教化伝道しようとしていました。そのパターンが永い年月を重ねた結果、落語という形式で残りました。またある僧侶は、人々を飽きさせないために、七五調でリズムカルに話しました。それが講談として伝わっています。そしてさらに人々に聞き入ってもらうために、楽器の伴奏で唄うようにした僧侶の努力が浪曲となりました。

同じルーツを持つ三きょうだいですが今は三者三様であることを、児童・生徒達には学校生活に置き換えて考えていただきます。日々の学校生活における学業と集団行動から学ぶことは、同じ学校に通う以上、全員が同じです。但しそこで学び得たことを土台に、個性の表現は児童・生徒達の数だけ有って良いということです。話芸の三きょうだいとのふれあいが、楽しみながら自己肯定の機会となるように努めています。